

漱石の『行人』と仏教

今 西 順 吉

一、はじめに

漱石の『行人』は甚だ問題の多い作品である。大正元年十二月六日から朝日新聞に連載されたが、第三章が四月七日に終って休載し、最後の第四章は九月十六日から再開された。約半年間の休載は病氣のためであったが、胃潰瘍と言われながらも、精神状態の異常も夫人によって報告されており、作品自体も異様なプロットを含むのみならず、主人公の告白には強い精神的逼迫があり、漱石の精神異常と深い関わりを持つものではないかと考えられて来た。漱石に異常な言動があったことは事実であり、それにもとづいて、漱石の生涯に三度の精神病期を認め、『行人』はその最後の時期に相当する、ということは今日では殆んど定説化していると言っても過言ではないであろう。特に精神医学の權威、千谷

七郎氏の『漱石の病跡』（一九六三年刊）は『行人』を中心にして精神医学的に考察を加え、その精神病は極めて明白なものであると断定した。また本書は思想・宗教に対する深い理解を背景に詳細に『行人』の内容を検討しているので、行人論、漱石論としても卓越しており、漱石研究史における一つの金字塔と言ってもさしつかえないであろう。

しかしそれにもかかわらずなお疑問が残る。もしも医学的に見て漱石の精神異常が確実であるのならば、諸医家の診断も一致することとをわれわれ門外漢は期待する。しかし実情は正反対であって、様々な病名が与えられている。のみならず、内因性、つまり真性の精神病ではなくて、心因性であると診断する医家もある。精神医学の門外漢にはどの説が正しいかを判断することは不可能であるから、漱石の精神病を自明のこととして前提するわけには

いかなることになる。それ故医学的領域については保留して、作品そのものがどこまで読みうるかを改めて課題としなければならぬ。

二、研究の方法

小説を理解するには、創作の機微について体験的によく通じている小説家の意見が尊重されるべきである。そして他の作品の場合には貴重な意見を見出すことが出来るが、『行人』に関しては、多くの作家がその特異性に嘆息している。文学研究者の見解についても同様であって、そのためにむしろ精神病の視角から扱われやすいのであろう。

しかし漱石は何故作家になったのか、その原点から考えるならば、漱石作品が思想の表現を目指していることは疑うことが出来ない。実際に『行人』第四章は深刻な思想の問題を扱っている。それをどのように読み解くかが『行人』研究の課題と言ってよい。そこで、第一に『行人』の構成について検討しなければならぬ。漱石はすでに二十歳の頃から文学を思想と表現の問題としてとらえていた。そして表現の手段としての構成に関して、漱石作品が緊密な構想のもとに構築されていることは、定評のあるところである。勿論『行人』の構成に関しても、先述の千谷氏を始めとする多くの研究があるが、新しい角度から再検討したい。そして作品中の諸要素（三角関係その他）をこの構成の中に位置づ

けることによって、文学作品としての全体像を把握しうるであらう。

第二に、構成が明らかになると、漱石がこの作品で何を表現しようとしたか、その構想、従って思想が顕わとなるであらう。そして思想に関しては漱石自身の資料がこの他にも多数存在するので、これらと突き合わせて吟味・検討することが可能である。その際に、漱石が漢詩・俳句に造詣が深く、散文作品の中に大胆な象徴的表現を投げ込むことのあることにも留意しなければならぬであらう。

最後に、『行人』という標題の意味について、以上の検討をふまえて考察したい。

三、初三章の構成と内容

この小説では一郎とその妻の直、弟の二郎、この三人の関係が中心にある。しかも直と二郎の和歌山行という異常で大胆な実験をするので、その方に読者の関心はひかれやすい。しかし細かに見てゆくと、三角関係といういかにも小説的題材とは全く別の様相が浮び上ってくる。

物語は二郎が友人と高野山に登ろうとして大阪に出かけるところから始まる。ところが友人は大阪で入院し、高野行が中止になり、たまたま大阪見物に来ることになった母と一郎夫婦に合流する。そして複雑な見物のあと帰京する。また二郎と家族の大阪行

には、貞と佐野の縁談をすすめるという問題もからんでいる。第一章の冒頭から縁談が伏線として描かれ、第三章で結婚に至っている。その点から見ると、全体として三章は貞と佐野の縁談から結婚までを時間の軸として、この間に様々な事件やエピソードが織り込まれている。

ところで事件やエピソードが次々に描かれてゆくが、それらには漱石の一貫した視点があると思われる。友人の三沢が入院した場面をとり上げてみよう。ここには二人の女性がからんでいる。一人はたまたま三沢と一緒に酒を飲んで持病の胃潰瘍を悪化させて入院している芸者である。三沢は死ぬかも知れないこの女性にあまりたい気持をもっている。もう一人の女性はその附添看護婦である。二人とも美人であるが、二郎が看護婦と親しくなるのを三沢は快く思わず、二郎はまた三沢が芸者と懇意になるのを望まない。二郎も三沢も二人の女性を実際にどうしようという丁簡もないのに、二人の間にはこのような暗闘、嫉妬があった。漱石はこれについて「性の争ひ」と書いているが、二郎は自分が我儘である、卑怯である、浅ましい、という自覚をもっている。ところが二人の男の間の性の争いはそれ以上には小説的發展をしていない。漱石の関心はそこにはないと言ってよい。むしろ三沢と芸者という二人の関係に対して、二郎が嫉妬をもったという事実を、自覚した点に作者の力点が置かれていると考えることが出来る。言い換えるならば、このような状況において人はどのような心の

働かせ方をするものであるか、そのことを読者は二郎という人物を通して知るのである。

次いで三沢は退院を前にして、芸者に挨拶に行く。二郎は三沢が芸者の病室から出てくるのを待ちわびている。漱石はその際の二郎の心の動きについて極く簡潔にしか描かないが、細かな描写をするならば、『彼岸過迄』のような心理描写となるであろうことをわれわれは承知している。『行人』における漱石の主題はその先にある。三沢が病室から出て来たとき、二郎が最も知りたかったことは、病室の中で二人の間にどんな話が交わされたか、ということである。何度も二郎は問いかけたが、三沢はそれに対しては結局答えることがなかった。もっとも三沢と芸者の関係については前に紹介したように、すでに説明があり、退院前に詫びたい、「気の毒な事をしたと一口詫まれば夫で好いんだ」と言っている。三沢が病室で芸者に語ったであろうことの大体の見当はつくけれども、漱石が力をいれているのは、三沢が実際に芸者に語ったことについて、直接二郎には答えなかった、という点である。

二郎は嫉妬という形で三沢と芸者の関係に対して関心をもった。ところが二人のつくり出す空間は閉ざされて、二郎のうかがい知ることの出来ない密室と化している。一組の男女がどのような世界を共有しているかを、その世界の外部にいる人間は知ることが出来ない。病院の出来事に関して漱石が言わんとすることはこの

ように理解しうるであらう。

さて、二郎の質問に答えるかわりに、三沢は芸者と何のかかわりもない話を二郎にする。三沢の父が知人の娘を世話して結婚させたが、間もなく離縁になり、三沢の家で預かることになった。

その娘は精神に異常をきたして、三沢の外出の度にまるで夫に對するやうに、「早く帰つて来て頂戴ね」と挨拶をする。三沢はその娘の心を推し測つて、「かうして生きてゐてもたつた一人で淋しくつて堪らないから、何うぞ助けて下さい、と袖にすがられるやうに感じた。」三沢はこの女性に對して内心では好意・同情を懷いていたが、それ以上の發展もないままに娘は死んでしまつた。その三回忌の法事の席で周囲の人々は三沢に對して非難した。すなわち、娘を不幸にしたのも精神病にしたのも原因は三沢にある、と全く理不尽な非難を加える。

このエピソードの意味はすでに明らかであらう。三沢をとりまく人々にとって、三沢と娘は一つの密室である。そしてその内部の実態を知らぬ人々が三沢の責任を追求する。ここでは密室が一つの社会に對置され、社会は密室に對して独自の判断を働かせる。その結果として密室の内部の人間と社会との間にはずれが生じ、そのことが苦悩の原因となる。社会内存在としての人間の苦しみが生まれる根拠を漱石はここに求めていると言えるであらう。子規宛の手紙(明治二十三年八月九日)の終りに「ああ正岡君、生て居ればこそ根もなき毀譽に心を勞し無実の褒貶に氣を揉んで鼠糞梁

上より落つるも胆を消すと禪坊に笑はれるではござらぬか」と書き、寺田寅彦宛葉書(三十七年二月八日)に書いた詩「水底の感」にも「うれし水底。清き吾等に、譏り遠く憂透らず。」と詠んでいるが、漱石はいま『行人』において毀譽褒貶の成立する構造を分析していると言える。漱石は二郎の目を通して叙述を進めているので、三沢の苦しみを客観視しているが、やがて二郎も同質の苦悩に陥ることとなる。

さて、三沢の場合からもう一歩進んだところに一郎の問題がある。精神病の娘の話を二郎が一郎に伝えると、一郎は次のように言う。娘は三沢に氣があつたのだ、と。その理由が重要である。精神病になると世間の手前とか義理とかを考えないですむから、胸に浮んだことを構わずに口に出して言うことが出来る。そこで一郎は「噫々女も氣狂にして見なくつちや、本体は到底解らないのかな」と溜息をする。

これは何を意味するのか。前述のように一組の男女は他からは了解不能の密室を形成するが、しからば密室の内部は緊密な空間となつてゐるのであらうか。そうでないことは一郎夫婦において明白である。他者に對しては密室である空間の内部にいる二人もまた、互いに他を了解しえない存在でしかない。ここにいたつて二人が形成する密室から、個人の胸の内に問題が深化してゆく。

一郎は二郎に問うた、「御前^{ごまへ}他の心が解るかい。」
氣狂になれば誰憚ることなく本心を語ると一郎は言うが、自

分の妻を氣狂にする訳にはいかない。そこで一郎は二郎をつかつて、妻である直の心を探偵させようと企てる。そして二郎と直を和歌山に送り出す。二人の意志で日帰りの予定であったが、嵐のために一泊を余儀なくされる。この事件は二つの側面をもっている。一つは嫂と義弟との関係という面であつて、小説としてはこの面から進展してゆく。すなわち、あつてはならないこの出来事のために、二人に対する家族の態度は變化する。また一郎は二郎から探偵の結果についての報告をいつまでも待っているが、二郎は兄が嫂に対して疑うような事實は少しもなかった、と言うのみで、一郎の期待に一向に答えようとしなない。このことはすでに三沢の場合について検討したことからも明らかのように、一郎に就いて二郎と妻の二人が完全に密室化したことを物語っている。さらに二郎はこれまで種々の関係において、密室の局外者であり続けたが、和歌山行によつて嫂と密室を共有した結果として、ここに二郎自身もまた家族全体によつて了解不能の存在と化してしまふ。漱石は二郎をめぐる家庭内の緊張を描き、二郎は家を出ることになる。

一郎に関してはここでは詳しい紹介を省略するが、以上の経緯によつて、二郎は一郎の心理状態の一部分を経験したことになる。一郎は精神異常のように周囲の人々から思われ（また漱石研究者の多くもそう考え）ているが、その心理状態の成立する根拠を分析して、順次複雑な総合を試みてゆくと、個人対個人、個人対

家族・社会の緊張関係がいかに不可避であるか。またこの緊張関係を鋭く意識する一郎が精神に異常をきたしたかのごとくに思われるが、それは単に一郎個人の特殊性と言つてすむ問題ではなく、現に二郎もまた同様の状態に陥っているではないか。漱石はそのように主張しているのであらう。

この点について漱石は一つの仕上げを試みている。嫂と二郎に対する疑いを強くする一郎を家族は狂人扱いする態度を見せるが、一郎はこれに対して反撃を加える。すなわち一郎自身が密室の中に入るによつて、家族に思い知らせようとするのである。それが佐野に嫁ぐ貞を一郎が書齋に招く場面である。多くの人々の面前で一郎はこの挙に出る。二人は三十分程書齋にいた。嫂は「平生の冷淡さに引き換へて、尋常のものより機嫌よく話たり笑つたりした。けれども其裏に不機嫌を蔵かくそうとする不自然の努力が強く潜在してゐる事」が二郎にはよくわかつた、と漱石は書いている。そして「書齋に入つた彼女（貞）が兄と差向ひで何んな談話をしたか、それは未だに知る事を得ない。自分丈ではない。其委細を知つてゐる者は彼等二人より以外には、恐らく天下に一人もあるまいと思ふ。」と書いている。もっともここで何が語られたかを作品の中から推測することは可能であるかも知れない。しかしこの場面を設定した意図が密室性の確認と強調にあることを、もはや疑うことは出来ないであらう。

二郎の和歌山行がもつ一つの側面が以上のように展開された。

しかしながら和歌山行の意味はそれだけで終るのではない。二人に関する『行人』の文章を詳しく検討すると、直と二郎の和歌山行にはもう一つの側面がある。それは直の本心を確かめる、ということである。それはすでに第一の側面として述べたことではないか、と思われるかも知れないが、違うのである。和歌山の宿で直が二郎にもらした心のうちとは次のごとくである。

「もし本当の海嘯が来てあすこ界限を悉皆攫つて行くんなら、妾本当に惜い事をしたと思ふわ」「何故つて、妾そんな物凄いの所が見たいんですもの」「あら本当よ二郎さん。妾死ぬなら首を縊つたり咽喉を突いたり、そんな小刀細工をするのは嫌よ。大水に攫はれるとか、雷火に打たれるとか、猛烈で一息な死に方がしたいんですもの」「ええ口に出したのは今夜が始めてかも知れなくつてよ。けれども死ぬ事は、死ぬ事丈は何うしたつて心の中で忘れた日はありやしないわ。だから嘘だと思ふなら、和歌の浦迄伴れて行つて頂戴。屹度浪の中に飛込んで死んで見せるから」

『行人』の主題が三角関係にあると見るならば、直のこの告白は扱いようがないであろう。もっとも二郎はその意味を理解出来ないで、これを聞いている「間始終彼女から翻弄されつつある様な心持がした。不思議な事に、其翻弄される心持が、自分に取て不愉快であるべき筈なのに、却て愉快でならなかつた」「何処となく無気味な感じがあつた。さうして其無気味さが甚だ狎れ易

い感じと妙に相伴つてゐた。」二郎の理解力をこの程度に設定することによって、二郎が受けた男女間のこの微妙な感じが、前述の三角関係という小説的展開を支えることになる。しかし同時にそこに二郎の限界もあることになる。

直の告白は一郎が期待した「本心」に相当する。そしてこれが和歌山行の第二の側面である。われわれはここに密室を腑分けして到達した個人の胸中を見せられたことになる。その激烈な風景に目をそむけることは容易であるが、なお漱石の心の世界をたどらねばならない。この問題を扱うには二郎では不足であることは直前に述べた。そこで一郎の同僚のHさんが登場することになる。初三章についてなお述べることもあるが、第四章の考察に移ることとしよう。

四、漱石の思想的展開の軌跡

一郎はHさんと旅に出た。その中で、箱根における一郎について次の記述がある。

午少し過には、多少の暴模様さへ見えて来ました。すると兄さんは突然立上つて尻を端折ります。是から山の中を歩くのだと云ひます。凄まじい雨に打たれて、谷崖の容赦なく無暗に運動するのだと主張します。／

兄さんはすぐ呼吸の塞るやうな風に向つて突進しました。水の音だか、空の音だか、何とも蚊とも喩へられない響の中を、

地面から跳ね上る護謄球のやうな勢ひで、ばんばん飛ぶのです。さうして血管の破裂する程大きな声を出して、ただわあつと叫びます。其勢ひは昨夜の隣室の客より何層倍猛烈だか分りません。声だつて彼よりも遙に野獣らしいのです。しかし其原始的な叫びは、口を出るや否や、すぐ風に攫つて行かれます。それを又雨が追ひ懸けて碎き尽します。兄さんは暫くして沈黙に帰りました。けれどもまだ歩き廻りました。呼吸が切れて仕方なくなる迄歩き廻りました。

我々が濡れ風のやうになつて宿へ帰つたのは、出てから一時間目でしたらうか、又二時間目に懸りましたらうか。私は臍^{へそ}の底まで冷えました。兄さんは唇の色を變へてゐました。湯に這入つて暖まつた時、兄さんはしきりに「痛快だ」と云ひました。自然に敵意がないから、いくら征服されても痛快なんでせう。

これが直の告白と同じ性格のものであることは否定出来ないのみならず子規宛の手紙（二十七年九月四日）にあるものとも全く同一である。すなわち、

南相の海角に到り日夜鹹水に浸り安りに手足を動かして落付かぬ心を制せんと企て居候折柄八朔二十十日の荒日と相成一面の青海原凄まじき光景を呈出致候は屈究と心の平かならぬ時は随分乱暴を致す者にて直ちに狂瀾の中に没して瞬時快哉を呼ぶ……

かくてわれわれは『行人』そのものを通して漱石の青年時代に引き着く。右の文章は青年時代の漱石の心の内面を如実に示すものであるが、青年時代に関しては別に詳しく考察するので、ここでは繰り返さないでおく。しかし初三章の検討を経てここに来るとき、一郎の胸の中の風と他者との關係という主題そのものが、漱石の青年時代以来のものであることを何人も容易に認めうるであらう。『行人』は緊密な構成のもとに、漱石自身を分析しているのである。「行人の原稿などは人の事にあらず自分の義務としてもまづ第一に何とか片付べきを矢張まだ書き終らざるにてもしか御承知願上度候勿論社会とも家族とも誰とも關係なき事柄故他人から見れば馬鹿もしくは氣狂に候へども小生の生活には是非共に必要に候」（中村翁宛 大正二年七月十八日）

これを單に精神病として扱つては漱石という個人は消滅してしまふであらう。心の風は事実であり、この風を内に宿す漱石に対して他者がどのように見ていたかもほぼ事実である。漱石夫人はその筆頭かも知れない。しかし漱石が一郎夫人の心の中にも同じ風を設定するとき、問題は普遍的性格を帯びてくる。元來この風の原因は、人間とは何か、死とは何か、という哲學的問題にある。これを解決しえないために、自分で自分を主宰することが出来ない。だからこそ「不測の變外界に起り、思ひがけぬ心は心の底より出で来る、容赦なく且乱暴に出で来る、海嘯と震災は、音に三陸と濃尾に起るのみならず、亦自家三寸の丹田中にあり、陰吞な

る哉」(「人生」一九二一年一〇月) 人生を真面目に考えるならばこの風は誰の胸の中にも起りうるはずだ、と漱石は言う。

漱石の生涯はこの課題に絶えず直面していた。『行人』の中でも例えば「兄は其時しきりに死といふものに就いて云々したさうである。彼は英吉利や亜米利加で流行る死後の研究といふ題目に興味を有つて、大分其方面を調べたさうである。けれども、何れも是れも彼には不満足だと云つたさうである。彼はメーテルリンクの論文も読んで見たが、矢張り普通のスピリチュアリズムと同じ様に詰らんものだと嘆息したさうである。」漱石の古典研究や哲学、中でも心理学への関心等もその焦点は一つである。その詳細もここでは省略するが、『行人』の叙述に即してこの問題の検討を加えておきたい。

一郎はHさんと各地を旅行した。それは漱石の生涯においても意味深い土地である。その一つに修善寺がある。

兄さんは時々立ち留まつて茂みの中に咲いてゐる百合を眺めました。一度などは白い花片をとくに指さして、「あれは僕の所有だ」と断りました。私にはそれが何の意味だか解りませんでした。別に聞き返す気も起らずに、とうとう天辺迄上りました。二人で其処にある茶屋に休んだ時、兄さんは又足の下に見える森だの谷だのを指して、「あれ等も悉く僕の所有だ」と云ひました。二度迄繰り返された此言葉で、私は始めて不審を起しました。然し其不審は其場ですぐ晴らす訳

に行きませんでした。私の質問に対する兄さんの答は、ただ淋しい笑に過ぎなかつたのです。

ここで「所有」という語の意味が重要であるが、この描写はホイットマンの詩を前提にしていると考えられる。

かつて毎日出かけていく子供がいた。

そして目をとめた最初のもの、そのものに彼はなった (that object he became)。

そしてその日一日、あるいは一日のある時間、

あるいは何年ものあいだ、あるいはうちつづく幾時代ものあいだ、そのものは彼の一部になっていた (that object became part of him)。

同様にしてあらゆるものが彼の一部分になったと歌う。ここには自己と他の一切との間の調和・融合がある。しかも同時に自己は主体として存在する。また漱石作品の背景から『法華経』の思想をもここに指摘することが出来る。「三界の火宅」を叙する「譬喩品」に「今、此の三界は皆是れ我が有なり」とあり、さらに「其の中の衆生は悉く是れ我が子なり」と言う。この有とは所有の意味である。如來は三界をその所有として有し、衆生に対して父たるものである。この構造そのものはキリスト教とも共通していると言つてよいであらう。端的に言えば、漱石は如來、キリストたらんと努めていたのである。この点について誤解を避けるためには多くの説明を要するが、漱石の不安の根源は、「われ一転せば

猿たらんわれ一転せば神たらん」「漱石子遂に猿に退化せんか將た神に昇進せんか」「無題」三十年一月）にあった。そして東西古今の典籍を究め、一つの見通しをもつことが出来た。漱石の「自己本位」はかくて到達した「自己」の認識を前提にするものであって、一般に理解されているような無制限・無内容の自己を意味するのではない。三界を我が所有なりと言い、一切衆生をわが子と呼ぶような自己である。そうしてかかる美しい調和・融和のある心境を大患後の一月ほど漱石は味わうことが出来た、と考えていた。先に引用した文章はそれを意味しており、しかもその終りにある「淋しい笑」とは、かかる世界観の崩壊を暗示しているのである。そのことは『思ひ出す事など』の分析によって別の機会に明らかにしたので、ここでは省略する。

修善寺の描写はこのような意味をもつものであるが、他に興津と箱根が重要な土地であるが、このうち興津は羽衣伝説の神仙思想と関わりをもち、このことも別の機会に述べておいた。箱根は明治二十三年に旅しており、夕映えの富士に深い感銘を覚え、そのことが思想的にも重要な意義をもっていた。詳しくは別の機会に発表するので、これ以上は述べないが、『行人』の旅における箱根は富士を仰ぎ見るどころか、前述のように嵐であった。このこともまた青年時代の思想的体験を否定する象徴的意味を荷負っている。このようにして修善寺、興津、箱根に関する『行人』の記述は漱石の思想の軌跡を正確に反映している。

しからば修善寺における幻滅はその後どのように展開していったのであろうか。漱石はやはり絶対を認めていた。「神は自己だ」「僕は絶対だ」しかし「ニイチェのやうな自我を主張する」のではないと言っているように、この神、自己、絶対は、どちらかと言えばニイチェ的な「自己本位」の自己とは区別される。そして絶対、絶対即絶対の境地について述べているが、その内容は『行人』の記述だけでは必ずしも明確とは言えないので、その核心を鮮明にするために他の多くの関係資料を必要とする。しかしすでに紙数も尽きたので結論だけを記すにとどめることとしたい。

一郎は次のように痛切に述懐する。

「僕は明かに絶対の境地を認めてゐる。然し僕の世界観が明かになればなる程、絶対は僕と離れて仕舞ふ。要するに僕は図を抜いて地理を調査する人だつたのだ。」

漱石が現在考えている「絶対」の世界観にとって、書物から得たこれまでの知識・研究は役に立たない、と言うのである。香巖に言及するのも全く同じ意味あいからである。鴻山は香巖を叱って言う、「御前のやうな意識を振り舞はして得意がる男はとても駄目だ」漱石にとってそれが「自己本位」を指し、これを否定していることは明らかであろう。そして「画に描いた餅」とは、禅の文脈においては「構想された自己」の意味であると言つてよい。後年漱石は「則天去私」の標語を立てるが、去私は「善も投げ悪も投げ、父母の生れない先の姿も投げ、一切を放下し尽す」

と言うのに対応していると解してさしつかえない。そして「父母未生以前本来の面目」とは青年時代の漱石が与えられた公案でもあり、右の文はこの公案に対する漱石半生の苦吟をも投げ出すことに通じている。従って「私」とは「自己本位」として構想された「自己」を指し、「去私」はそれを放下することである。また「絶対」に入る、という議論の前に、「私（Hさん）は神といふものを知らない癖に、神といふ言葉を口にしました。兄さんから反問された時に、それは天とか命とかいふ意味と同じものだと漠然答へて置いたら、まだ可かつたかも知れません。」という文章がある。ここにある「天」が絶対の意味にも通じることを意味しており、従って則天の天もそれと同一と解してさしつかえない。

則天去私の標語自体は後年になって記されるが、その内容は『行人』の中に明瞭に記されているのである。従って『行人』は半生の総決算と言うことが出来る。

五、『行人』の題意

『行人』という標題の意味について小宮豊隆氏が難解な解釈を打ち出したため、その後議論が全くなかった。唯一の例外が千谷氏の説である。千谷氏は作品の分析をふまえて使者と解し、二郎をこれにあてる。従ってこの作品の主人公も二郎と言うことになる。しかしこの解釈は作品論としても無理であることは前述のところからも明らかであろう。行人の語は道を「行く人」が原義で

あり、漱石の用語としては「車馬行人」（『文学論』）の用例がある。そして旅人を意味する。明治二十三年の箱根行で詠んだ漢詩の中にも、「駅馬鈴声遠く、行人笑語稀なり」とあり、行人と同義の征人も「一夜征人の夢」の用例をもち、「昨夜征衣を着け」と「旅」の意味で征の字を用いている。偶然古書店の店頭で開いた『明治天皇御集謹解』（佐々木信綱訳註、一一八頁）の明治三十六年のところに「原の行人」と題して「人あまためてだに旅はさびしきを荒野の原をひとりゆくらむ」の歌を見出した。守屋多々志画伯の「行人」（一九八四）と題する画は一筋の道を行く旅僧を描いている。

漱石が精神的緊張に陥った時、旅に出たことは余りにも有名である。箱根行を含む学生時代の何度かの旅、松山転出という旅、留学からの帰国直前に行ったピトロクリへの旅、『門』のあとの修善寺への旅、いずれも共通性をもっている。そして『彼岸過迄』の結末では旅に出ることを主人公にすすめている。その旅を漱石は『行人』の中で実行した。ところで旅を意味する題名をもつ作品が『草枕』として存在する。にもかかわらず敢えて漱石が『行人』と題した理由はすでに明白である。「自己本位」に立つ『草枕』を否定し、新しい、漱石にとっての真の旅を試みたのである。

〔付記〕紙数超過のため、注を割愛いたしました。

（いまにし・じゅんきち、インド哲学・仏教学、

北海道大学助教授）